

私の一文字「夢」

副代表幹事
大八木 成男

帝人
相談役



企業経営者の役割は人に「夢」を見させること

会員の方が思いを込めて選んだ一字に、書家の岡西佑奈さんが命を吹き込む「私の一文字」。第7回にご登場いただいたのは、大八木成男副代表幹事です。

大八木 僕は普段「何か言葉を」と問われたときは「好奇心」と書きます。好奇心は稀なるものを掬う心。今回好奇心から一文字を選ぶのは難しかったので、「夢」にしました。

岡西 夢という文字の成り立ちで有力と言われる説は二つあります。一つは夕暮れの森の中、周りがよく見えない、ぼんやりした状態を意味するというもの。もう一つは「艸」と下の「目」が媚女（神に仕える巫女）、「夕」が座っている姿、「夕」は夜を表すというもの。古代中国では、夢は媚女が操る呪いの力によって起きると考えられていたそうです。

大八木 おっしゃるように、夢とは何かぼんやりしていて、それだけでは理想的な形にはなりません。夢にエネルギーを加えると好奇心が表現できないかと思い、力溢れる「夢」を岡西さんに託すとどんな文字になるだろうと、今日は楽しみにして来ました。

岡西 事前にいただいた大八木さんのメッセージや直筆の「夢」の文字を拝見し、左（未来）へという想いが感じられたので、未来へ向けるイメージで描きました。

大八木 そうでしたか。僕はこれまでたくさんの夢を見させてもらいました。企業を離れても、生きている限り夢は持ち続けていくものだと思います。

岡西 さまざまな夢を実現されてきた大八木さんですが、どんな新人時代を過ごされたんですか？

大八木 上司から「ビジネスは白いキャンバスにデッサンを描くようなもの」と教わり、「デッサンを描け」とよく言われていました。思えば、新人のときからそうやって鍛えられていったのだと思います。僕の最初の仕事は、部長から渡された「部長月報」の清書でした。僕らの時代はワープロもない時代。字が上手でないといけないから、数字は数字定規で一生懸命書きました。右から左へと書き写すような仕事ですから間違いようがないと思いますよね。ところが、不思議なもので上司が確認すると必ずミスが見つかる。同じミスを繰り返さないことが大切だということも若いうちに学びました。

岡西 私も失敗から多くのことを学びました。ところで、今の八木さんの企業人としての夢は何ですか。

大八木 先日ある企業の社長さんが、「企業のトップは大きな“ホラ”を吹かないといけない」と言われたんです。彼が言うには、「20年前に吹いた大きなホラは今、大きな実績になっている」と。つまり、ホラとは大きな構想、人に夢を見させるということです。企業のトップの役割は長期的な未来を視野に入れて、10年後、20年後のありたい姿と、それを実現するために何をするかという「夢」を語ること。新しいビジネスの柱を立てようとした場合には、ビジョンから考えていかなければいけません。会社を変えるには、大きな「ホラ」を吹くぐらいの気持ちで取り組む必要があるのです。往々にして今のような短期志向の社会では、「そんなことを言ったってこの人は何にもやらなかった」とか書かれます。でも、それでいいんですよ。経営者の役割は、人をはじめとした経営資源を全て動かして、目標に向かって全力を傾注すること、その結果がどうなるかは次の世代へ託すことではないか。私はそれこそ経営者が見せる力強い夢だと思うのです。



書家
岡西 佑奈

1985年3月生まれ。23歳で書家として活動を始め、国内外受賞歴多数。